

三河アララギ

2022年 令和4年3月 弥生
やよい

三 月 号

第 六 十 九 卷 第 三 号



ニューヨーク日記(185) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

HAPPY 2022, ALMOST
Blue Shoe Diaries



ハロー日本！ 富士山！ 明けましておめでとうございます！ 日本に着いたことは着いたけどまだこれから6日間強制隔離ホテル行きです（そのあとは自宅隔離が8日間）。それでも日本で過ごせるお正月は嬉しいな。何処よりもお正月は日本。伝統的な習慣も素敵だし日本で始めると良い年になるかなあって気がするし、やっぱりお正月の食べ物！ 遅れて食べるけどお節楽しみだな。

Hello Japan! Happy New Year! But only almost since we are on our way to a government-mandated quarantine hotel for the next six days (and 8 more days to self-quarantine). Despite that, happy to be here. Japanese New Year celebrations feel most special. Lots of traditions, aspirations, and most of all, great New Year's food which we'll enjoy a little delayed this year.

目次

第六十九卷第三号(通卷八一十九号)

表紙・ハカランダ	今泉 由利 (1)	三田美奈子 (24)	植村 公女 (34)
ニューヨーク日記(185)	Blue Shoe (2)	水野 絹子 (25)	木村 歩歩 (35)
歌集 わが冬葵	御津 磯夫 (4)	牧原 規恵 (25)	今泉 如雲 (34)
歌集「續々草々」	今泉 米子 (5)	稲吉 友江 (25)	今泉 由利 (34)
三河アララギ歌集	熊谷 豊 (6)	鈴木美耶子 (25)	矢崎 直人 (35)
三河アララギ歌集	小早川治子 (7)	吉見 幸子 (25)	濱田 紀政 (36)
牡丹雪	岡本八千代 (8)	東洋大学	かさね吟行会
今年の初日	弓谷 久子 (10)	山本 美緒 (26)	『酔いの徒然』(119)
聖観音菩薩	今泉 由利 (12)	濱田 花純 (26)	楽しい時間(112)
初鏡	安藤 和代 (14)	北森 葵 (26)	絹の話(136)
読経	清澤 範子 (15)	新井 薫乃 (26)	本田カイロプフラクティク先生の春夏秋冬
風凍る	伊藤 忠男 (16)	濱井 大季 (27)	『江上浩二の独り言』
風の音	矢崎 直人 (17)	吉野 愛香 (27)	初狩便り4
初暦	森岡 陽子 (18)	影長 美咲 (27)	『千曲川旅情の歌』に想いを馳せて
豊川稲荷	白井 信昭 (19)	奈良澤杏夏 (27)	中屋 保之 (50)
小正月	杉浦恵美子 (20)	森岡 陽子 (28)	千枝女将の別宴に寄す
逢はぬまに	山口千恵子 (21)	童謡昭和こどもの四季「こどもは風の子」	奄美泥染
結び松・片男波	夏目 勝弘 (22)	『俳句』	奄美泥染
『いとよせ』	いーはとぶ	高橋 育郎 (30)	康鍼治療院
		松本 周二 (32)	『氷魚』のことから(254)
		森岡 陽子 (32)	岡本八千代 (58)
		森 厚子 (24)	編集室だより
		山崎 俊子 (24)	今泉 由利 (59)
		伊藤 晴江 (24)	『三河アララギ』について
			(60)

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

磯城^{しき}の山垣山いく重黄葉^{もみじ}して夕日華やぐ冤罪の寺

つひにして蘇我の門なれば滅びにき山田に寺の石をのこして

佛頭のまなざし思ひつつ茅萱分けて金堂址といふ石平らなり

杭うちて畦をまもるか細き畦つたひゆくべし塔址の丘へ

君臣も一族のみか肉親もあひ討ちてほろびゆきにし歴史

山茶花の白妙八重の花重し父亡き十年に伸びて咲く枝

参道に一丁目の石柱傾けりゆきすぎてまた二丁目を見ず

一年の終りの日にも人逝きて死亡證を書くわれは生きをり

夜の空を見ることすでに無くなりし我を五日の月に呼ぶつま

沈丁花ひとと赤くひろがりて茂吉之墓の文字はかはらず

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

花の色と大空の色と一ひといろに暮れてゆくかな風ぎしづまりて

ほのぼのとたのしかりけり頂ける南瓜一片の今朝の味噌汁

イギリスの高校楽しと便り来ぬクラスの中に日本人はひとり

蓑虫の付きたるままに瓶に挿す窓より受けたる花利休梅

三百年伝へ来たりし山水の南蛮染付の大皿重し

重々し南蛮染付の大皿に朝々来る郵便物を置く

東京より来ましし人も十薬の花の中なるわが庭の徑

テーブルの上に小箱を六つ並べ江戸風鈴を買ってきました

風鈴をと思ひゐるとき篠原の吹き硝子手描きの江戸風鈴六つ

黄に熟れし杏一つを掌の上に奥の庭より翁帰り来

三河アララギ歌集

熊谷

豊

引き出せば喜び跳ねる吾が牛の犁かくればはや涙を落す

四反五畝の峡田鋤くべき時来り削蹄終へたる牛引き帰る

一日中牛に引きずられて代を掻き傷だらけの足のまた痛み出づ

牛運の悪きわれ追ひ追ひて夕べ毛並に霜の如き汗

刈り刈りて匂ふ青菜を負ひ下る芽の出揃ひし蒟蒻のため

敷柴の上たのもしき茎立ちて風に靡けり二畝の蒟蒻

わが顔のほのかにほてる心地して夕映えの畑に麦を踏みゆく

次々に観光バスに乗り込みて遠き土地より稲を見に来る

朝々に山水止めて温むる二十一の田の畦の往還

施肥休業で伐採期早めむと思ふだけで楽しい下刈りながら

三河アララギ歌集

小早川治子

蘇芳といふ花を教へられしこと一つ怠りてゐし日記にしるす

美女桜やさしき花をつけゐたり病みても君は倖せと思ふ

酔へば必ず父が謡ひし櫻川いつしかわれの口ずさみ居り

享保十年創業の製油工場に二十年勤めてわれは庶務タイピスト

前掛に子の椀ぐ梅を受けゐつつかかるくらしの続けよと思ふ

アイリスを独り活け居りいつしかに子に忘れられしわが誕生日に

誕生日の己祝ふとわがつくるシチューも焼豚も子の好むもの

洗ひてもカーボンの汚れ残れる手におづおづと春の手袋選ぶ

檜扇は黒く小さき実を持てり職退かむ日の近くなりつつ

季節風募りし夕べ帰り来て乾きし流しに米磨き始む

牡丹雪 ぼたんゆき

蒲郡 岡本八千代

牡丹雪を降らす大きな雲一つしばらく動かずわが北窓にゐる

それにしても今日の私ただこの雲を見てゐるだけか泣けてくるかな

春二月未だ震える寒さにて思ふことはみな淋しかりけり

しかたなしわたしは人間感情のあることこそその倖はせなのか

ここにある小さきキャラメル一つふふみ牡丹雪見てゐる今の倖はせ

雪降らす雲も動かずわたくしも動けずにしてやはりかなしよ

今日もまたベットより見える同じ景色ああ悲しああ寂しえ

牡丹雪降らせる大き雲さへもふるえてゐるではないかいな

春二月未だふるえる寒さなれば思ふことはみな寂びしかりけり

ベツトまで今日は教へ子のひとりきぬ「序破急」の法則のこと話したり

何にもかも運命なのだと思いつつ動かぬ雲を見てをりぬ

牡丹雪わが北窓に降る姿あはれ美し私は驚かざり

わがむすめ二人がわれを看病すこのわがまま母親われを

母親を看病してくれるわが娘らこんなにやさしき娘らとは思はざりしに

われにある娘二人のありがたさ今こそ思ふしみじみ思ふ

今年の初日

豊川 弓谷 久子

移り来て三度目の正月同じ席に座りて待ちをり今年の初日

奥山の大きくすの木の間より射し来る初日身に浴びてをり

今年初の世界遺産の番組は富士山の四季ああ美しきかな

小学校にて歌ひし唱歌浮かび来る「富士は日本一の山」

頂きし栗蒸し羊羹子の点てし抹茶一服満ち足りる午後

我が夫の立ち日と同じ一月二日君逝き給ふと教えられたり

歌会も勉強会にもひたすらなりき君の面影思い出尽きず

縁先に並べ置きたり十日の市に子を買ひくれし桜草の鉢

とりどりの色並びたり桜草一足早き春の気分よ

豪雪地帯の苦勞を偲ぶ珍らしき粉雪の舞ふ庭眺めつつ

大寒の名にふさはしき寒さかな庭のバケツに氷張りをり

貰いたる白菜漬けあり恵まれし人の情けの中に生きをり

子の編みし赤鬼青鬼あまりにも愛らし過ぎる立春近し

新聞に先づ確かむる感染者数何処まで続くコロナウイルス

ふえ続くオミクロン株さきゆきの見えざる不安一月も逝く

聖観音菩薩

東京 今泉 由利

一刀を一刀毎を心して彫り続けいる聖観音菩薩に逢はむ

聖観音像彫りゐる日々にして自ずからなる静寂のなか

一刀を一刀毎に新しき香りいでこし香り重ぬる

新しい檜の香りをつくりつつこの幸せの日々の重なり

「フンガ・トンガ・フンガ・ハアパイ」私の窓の太陽仰ぐ

仏とは性別について男女超え人については存在を超え

仏とは太陽のごとく太陽であり母のごとく母であると

歩きはじめた玉由はペンギンについてゆくペンギンの家ハルデス半島

アルゼンチンに生まれし由野の誕生日由野の歴史としみじみ過す

蓮の芽のほんのり梅酢色にして今日は由野の誕生日

カリカリとやさしく手引くかガーと機械音がジャマイカよりのコーヒー豆よ

三十八階の窓よりの見下ろしは武道館・皇居の森・国会議事堂・富士山も

雲海のまっただなかを突き抜ける富士山頂上見下ろすしばし

どのビルも屋上並^なべて®マーク逃げるといふを思ひてしまふ

蓮蕾・蓮の花・蓮大葉・蓮根・蓮芽の梅酢漬の色

初 鏡

豊川 安 藤 和 代

若水に四方清めてこの年も健やかであれと皺の手合す

若き日は母似と言われ老ゆ今は父似と言わるを見る初鏡

孫嫁と茶を飲む朝ようれしけれ庭の紅梅芽吹き初めしぞ

萩焼きに瀬戸焼きの黄新春の食器戸棚も春めきており

短歌ありて風にも雨にも色のあり野も山脈も胸に位置しむ

箱根路の応援の声聞こえて来てエプロンの紺ギユギユツと結ぶ

図書館でアララギ誌必ず読むと言う友いて心の花も満開

字でわかる友の便りの封を切るそのときめきよ人生も春

敬老会名簿の中に君の名のありてうれしや山茶花は紅

今さらに美しく老いなど思わねど花柄ピンクのセーターを着る

伊良湖なる浜風うけて切干大根友の手作りをホクホクと煮る

読 経

春日井 清 澤 範 子

名大病院にて斜視の手術をしてから一ヶ月検診良好ですと

一月十八日新聞紙面にて岸田総理の施政表明に目を通しぬ

文学を書き始むるもさてどう書くか娘に漢字を教えられたり

松本より野菜キャベツ人参と信州の味たっぷり頂く

吾背丈小さく縮む腰痛のしびれ来る手を悲しく見つむ

出来ること出来ることも多くして新聞殺伐とした記事ばかり

夫の残せし庭に可愛いく赤き実の千両色づく庭の賑わひ

亡き夫の祭壇にお佛ぶく供さん供えるは吾がつとめなり丸く盛りつけ

松本一本葱の入りし段ボール娘と吾とで食べつくしたり

亡き夫の残せし庭にしいたけの菌打ち込みたる原木そのまま

今朝の朝陽明るくさしこむ室娘線香われ読経

風凍る

大阪 伊藤 忠 男

石の上三年たてば何とかとコロナ今年で三年目なり

雲間より覗く朝日もいつの間に隠れ冷え込み旧年超える

如月と言いて重ね着自然なり厳しき寒さごく当たり前

薄日差しちらつく小雪煌めきておとぎの国へ迷い込むなり

あれよあれ綿雪変わり窓の外面白く衣替える

金剛の山並み雪で初化粧夕陽を受けて燃え盛るなり

梅の花つばみ膨らみ芳しき香りもうすぐ待ち遠しこと

海底のマグマ吹上げ海ならず空気揺らして波興すとは

段ボール重ね加工し張り合わせ出来た本立て我が自慢なり

家内へのサービス忘れず誕生日ケーキ手に持ち軽い足取り

風の音

東京 矢崎直人

熱海から十キロ離る初島に二十三分フェリーは進む

湾内に海豚の群れてジャンプせし揃いのジャケット着ける釣り客

船着き場リゾート向かう道すがら磯の料理の食堂並ぶ

灯台に登りてぐるり見渡せば阿久悠校歌書きたるままの

島に来て島から見れば日の本の島であること思い出されん

海岸に流れ着きたる石の旅海底湧くる滾れる地の血

風の音打ち寄せてくる波の音鳥の鳴き声島のひととき

笠雲を頂く富士の山腹の雪の着物の一際白く

遊ぶだけ遊んで帰るフェリーには揺られる夢と海の匂いと

降り出せし時雨の夜に初島の灯台位置を示し続けて

初 曆

東京 森 岡 陽 子

ひと時の旅の楽しさ温泉の入浴剤でのんびりゆつくり

初雪に隣の子等は雪うさぎ我々家の庭の実万両が目

始まりは今日からですと初曆早速しるす友との散策

初席やマスクの下で声出せず笑う辛しや拍手するのみ

窓越しの隣りの方との挨拶もまだまだ続くマスクの顔で

横向きに下向きに咲く蠟梅は香りで見付く買物帰り

早梅のたった五本の公園に梅林の看板香りかけ行く

枯草にまじるは小さき青々と生れたばかりの草に白い花

枝いっぱい蕾のついた紅梅のひらき始めし花を見付ける

豊川稲荷

豊川 白井 信昭

朝起きの冷冷えの中玄関の引戸あければ細雪さいゆきまふ

わが植えき忘れしままの五月躑躅さつきつつじ行在所あとに九本残る

幾久しく家族五人の早詣豊川稲荷たりの晦日みそかの真昼間

年たけてまた来るべしと思ひきやここ妙巖寺みょうがんじ命なりけり

わが孫を代る代りに抱き抱え長く囲める塀に沿いつつ

総門を背に記念にとわが嫁は家族の写真撮りてくれたり

境内の人出はまばらに佇める今も昔も変わらぬ眺め

参道をゆつくり上がりゆく左側杖つく妻を気遣いながら

拝殿の賽銭箱の奥よりは読経の低く響き来たれる

正月の西風まぜ吹き晴れて遠面にも山の稜線くつきり見ゆる

小正月

蒲郡 杉浦恵美子

枝の先団子刺す為モチイには団子の数だけ小枝が要るなり

白。ピンク黄色に緑の四色がモチイの団子の定番の色

小寒と大寒はざまの小正月モチイの団子の花が咲きをり

コロナとて年始は人來ず過ぎしまま早くも小正月モチイの飾り

とは言へど自問自答の我が暮らし眩くのみにて日が暮れて行く

群雀山茶花垣根に日向ぼっこ鴨現れ千々に飛び去る

垣根には早くも蓬萌え出でぬ若葉を摘みて思ふは天麴羅

東海市名和町に行く七七忌叔母や母等が育ちしふるさと

名和町は母に連れられ幾たびか訪ねし町ぞ祖母に逢ふため

叔母逝きて名和に來ることもうあるまい名古屋近郊産業の街

逢はぬまに

豊川 山口千恵子

デイゴの木剪り払はれて広き土縄に区切られ駐車場に

郵便受けの口をガムテープにふさぎつつ無人となりて久しきこの家

雪降るかと見上げつつある窓の外冬木の楓細々の枝

寒き朝霜柱踏みきさくさくと感触いまもよみがへりくる

他人事の如き思ひに聞きてゐるテレビ伝ふる積雪ニュース

午後になり晴天くもり寒くなる窓を横切り小鳥とびゆく

寺よりの報恩講のお知らせを新しきカレンダーに印しおくなり

貰ひたる未だ蕾の菊の花水たつぷりと一輪ざしに

さそはれてインドカレーの店にいるその味異なるわれの味とは

逢はぬまに背丈伸びたり男孫職得し一人学生一人

結び松

豊川 夏目勝弘

岩代いわしろの無人駅の箱のなかキップを落して結びの松へ

梅を干す匂ひただよふ畑道を結びの松の標べにしたがふ

陥しむるは今に明日に絶ゆるなし皇子みこは岩代の地霊に祈りし

霜月の海風ただに受けながら罪人つみびととなりし皇子ゆきし道

結び松いしぶみの碑の片辺の幼松植ゑ変へ植ゑられ幾世代目か

岩代も荒畑目にたつ願ひつつ結ぶ草根のあまりに多し

重おもと皇子のひかれ行きし道車の切れ間を小走りに横切る

藤白のみ坂に皇子は絞首されし熊野古道に小さき墓あり

供華供物酒のあるなり墓の前有間皇子は十九歳ぞ

黄菊白菊あたらしし手作りの箱に賽を落しぬ

片男波

都より万葉人は四日余り我は四時間玉津島山

若の浦に思ひをはすは万葉時代救急車きたりてうつつに戻る

家包につつみゆきたしと都人我はデジカメに玉津島山

妹背山五分たらずにて頂に潮引きし州に鳥らまだ来ず

若の浦の干潟に来しは鶴タスならず黒鳥カラスが群れつつ降りる

片男波に並ぶフリーマーケットの前をすぎ万葉歌碑の静かなる道

満つ湖に干潟飛びたつ白鳥は葦辺に向かはず松の林に

ジパングの手帳を見せて無料なり万葉館にて汗ひくをまつ

和歌川に湖満ち止まる名草山鏡なす水面におだしき山容

干潟また満つ湖を見て片男波いざ帰りなむ一夜の宿に

『いっしょに』

西浦公民館 いーはとぶ

鼻腔までズーンと響き「抜けました」と割れゐる歯根は生き生きの色
暗きなかカーテンを開け水供ふ明るむなかにテレビ体操す
牧原 正枝

七五三の孫ら三人晴れ着にて嬰兒は抱かれご祈祷を授く
七五三のご祈祷授かる孫三人コロナ禍の今夫と境内に
森 厚子

枯草の踏む音聞きつつ浜辺へと茜に染まる海を見にゆく
冬雲のゆるりと流るる空見上ぐひとりの我はいつまでもながむ
山崎 俊子

児童らのリクエストにそふ女教師のフルートの音の高くやはらかく
我と娘息子の三人居酒屋に幼き日々をただ語りつつ
伊藤 晴江

指折りてお年玉袋の数かぞふあの孫この孫の笑顔おもひつつ
朝夕の「在家勤行」これだけが彼岸の夫とわれとをつなぐか
三田 美奈子

湯に浸かる母に手を貸す我が夫よその背に横切るこの四十年余
散り惑ふ黄葉もみぢの山吹打ち払ふやうやう顔出す千両の赤

水野 絹子

年末の恒例行事のよもぎ摘みやはらか新芽の先のみを摘む
五十年作り続けゐるよもぎ餅新しき年へ今なほ変はらず

牧原 規惠

わが幼団栗拾へば小さき手にそつと包みぬ宝物のごと
手袋と帽子とダウンの装備して太極拳へと大寒の朝

稲吉 友江

玄関を出づればそこに「私よ」とそつとマスクとる阿部さんがゐる
十五歳迎へる孫へのプレゼント未だ決められぬ大きくなりぬ

鈴木美耶子

道端の風にゆられて黄コスモス我は車窓よりしばし見つむる
わが庭の霜枯れの時をひと廻り好みの色を合はせ創作す

吉見 幸子

現代学生百人一首

東洋大学

小学生の部

母ちゃんの入道雲が発達し大きなカミナリ私に落ちた

堺市立深井西小学校六年（大阪府）

山^{やま}

本^{もと}

美^み

緒^お

12歳

あこがれる心にひびくやさしさがみんなに届く教師になりたい

新上五島町青方小学校六年（長崎県）

濱^{はま}

田^だ

花^か

純^{すみ}

12歳

秀逸作品

「なぜうちを？」今日はこちらがきいてみるスーツの私と巣かける燕

筑波大学四年（茨城県）

北森

葵

21歳

ひこばえの青々とした姿みていまを生きろと背中おされる

埼玉県立川越総合高等学校三年 新井 薫 乃 18歳

「なんでもない」強がりすぎて離れてく寂しい顔した本当の友達

埼玉県立坂戸西高等学校三年 濱井 大季 18才

ごうごうと新米乾かす音がする我が家の秋はここから始まる

埼玉県立松山女子高等学校二年 吉野 愛香 17歳

教科書に載る恋歌の乙女らと恋バナしたく五限の古典

千葉県立千葉東高等学校三年 影長 美咲 18歳

外出ればひっきりなしの情報に疲れた私を包む祖母の手

学習院女子高等科二年 奈良澤 杏夏 17歳

贈呈誌

森岡陽子

月虹 2022・2 第114号

○ここにきて零か百かを言う勿れしずかに傘は閉じて置きます

三原香代

○わがうちに密かに燃ゆるもののごと夕雲ひとひら赤く暮れのこる

杉山千里

○山間の車窓に時雨おさまりて虹の巨大に歓声上がる

不破明子

○弱き人置き去りになる世の歪みマグマとなりて流れる連鎖

坪根恭子

○負けないぞ若き風潮に押され折れ来た積み上げし我らの気概

中村力ズエ

冬雷 2022年 2月号

○降りそそぐ雨に楓の青き葉が光りて揺るる朝にかがやき

赤羽佳年

○冬の日のあまねく差せる枯芝の本丸跡にふゆさくら咲く

森藤ふみ

○「朝顔の種」と記したマツチ箱母の針箱に潜ませありぬ

田端五百子

○芽ぐみどき青葉の時ともみぢどき一本の木にひととせを見つ

古嶋せい子

○カサカサと落ち葉踏む音軽やかに白い吐息光に消えゆく

野崎礼子

○名物の寒さは恵みの柿すだれ精出す人らの温もり籠る

岩淵綾子

○満月と思つて見上げた夜空にはあるはずのない三日月ばかり

吉田佐好子

○繁り合う柳の葉に守られて幼き鳥は巢立ちたるかや

本郷歌子

○暁けの道たぬき親子は関越の歩道橋わたりぬわが前そろり

町田勝男

○人氣無き野辺の陽だまり黄の蝶一つひらひら我に寄り来る

川上美智子

昭和・こどもの四季 「こどもは風の子」

高橋育郎

お正月は 風あげだ

「風 風 揚がれ 天まで揚がれ」

絵風 に字風に奴風

原っぱに群がり 舞っている

羽根つきする子は おべべ着て

羽子板の絵も 可愛い子

追羽根突く音 爽やかで

お正月を祝う 響きです

雪が積もれば 雪だるま

たどんのお目々が かわいいな

雪のウサギは ナンテンの赤い実お目々で

葉っぱがお耳 だんだん溶けてく またつくろう

広場のこどもは雪合戦

寒さ忘れて汗をかく

おうちの中では カルタ取り

おこたに入って しりとり 綾取り

影絵に双六 福笑い

「ずいずいずつころはし 〴〵まみそずい

茶壺に追われて とっぴんしゃん」

春になれば 花摘みします

すみれ たんぽぽ クローバー

摘んだお花で 花輪をつくる

「お手々つないで 野道をゆけば みんなかわいい小鳥に

なつて」

歌をうたつて 帰ります 山のお寺の 鐘が鳴る

学校帰りの近道に ほんのり匂う 梅の花 鶯さえず

り うれしいな

小川に行けば しじみとり めだかを掬って帰ります

土手にかわいい土筆の坊や 土筆を摘んでかえります

夏になれば 川遊び 僕は犬かきおぼえたよ 海水浴も楽

しみだ

夕方 蛍が飛んでくる

「あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ ほっほっ螢こ

い」

蝉が みんな 鳴きだせば

大きな網と 虫籠もつて 蝉取りしてる子 半ズボン

水鉄砲に歓声あがる シャボン玉もたのしいな

お盆になれば 提灯ともし 提灯行列 下駄の音

縁台の夕涼みに 練香花火 どんと鳴った花火は 遠くの

空よ

夏の祭はお神輿ワッショイ そのあと 天狗のお祓いだ

こどもは怖くて 目をつぶる

行つてしまえば こつちのもののさ 縁台のまわりでは

しゃぎ出す

秋には 稲穂がこうべをさげる
イナゴが飛び交い イナゴとり
袋にいったい採ってきて イナゴの佃煮 おいしいな
弁当開ければ みなイナゴ 教室いっぱいイナゴのお
い

どんぐり山で どんぐり拾い
杉の林で 杉の葉拾い 竈で燃やせば よく燃える
赤とんぼ 止まっているよ 竿の先

秋空 青く澄み渡り 小学校は運動会
綱引き かけっこ 騎馬戦に かけ声高くこだまする

冬になれば 霜がおり かじかむお手々に息をかけて
ほっぺが赤い子 かわいいな

「二番星 みーつけた」「二番星みーつけた」
母さん呼んでる「ごはんだよー」

雪が積もれば 雪だるま お目々はたどんで 三角帽子
広場に戯れ雪合戦 雪球飛び交う にぎやかさ

家に帰れば 炬燵に入り 冷えた手足を温める
「あずき粥 煮えたかどうか 食べてみよう」
おばあちゃんと お話しうれしいな

クリスマスにはサンタクロース 枕元には靴下おいて
サンタのおじさん あいたいな

四季をとおして 遊ぶのは
かくれんぼするもの この指とまれ
せつせつせ ばらりこせ
じゃんけんポンよ あいこでしょ
負けたら 鬼だ ヨーイどん
鬼ごっこ 追いつ追われつ とびまわる
目かくし鬼さん 手の鳴る方へ
馬とび 縄跳び 大波こなみ
押しくら饅頭 押されて泣くな
相撲も番付つけている

女の子は ままごと遊び
男の子は お客さん
勝つてうれしい花いちもんめ あの子がほしい
あの子の名前をいうの はずかしい

めんこ ビー玉 ベーごまと そしてけん玉
竹馬乗って芸気取り 駆逐水雷 石けりケンケン
鬼は後ろ向いて「だるまさんがころんだ」
「活動」観てきて チャンバラごっこ

さいちの塗り絵に 折り紙は鶴と兜をよく折った
カルタ トランプ ハサミ将棋に五ならべと
遊びが いっぱい昭和の子

男の子もおべ着て 下駄がカラコン 響いてる
桃の節句と端午の節句 どちらも楽しい こどものま
つり

桃太郎さんごっこもしていたよ
もういくつ寝るとお正月
早く来いこい お正月

『俳句』

古民家のからたち何処へ白秋忌

重野善恵

姉しかと支へて仰ぐ冬紅葉

金星と木星並ぶ冬の空

菊づくしてふ着物きて七五三

浜田紀政

冬深しイオンに並ぶコンテナ車

御神木の刻む年輪落葉散る

悲恋なる二人の墓に紅葉散る

松本周二

小さき石の祠も閉ぢて神の旅

バイオリン弾きつつ歌ふ木の葉髪

神社うら山茶花のなほ散りやまず

森岡陽子

空仰ぐ狛犬の児や木の葉雨

毛布端犬に引かれて目覚めけり

冬田打つ一鍬ごとに風を入れ

山元正規

その昔渡しありけり都鳥

日おもてに色を尽くして冬紅葉

生国で終の住家で寝正月

植村公女

若菜粥ひとつ不足のままに炊き

願ひ事ひとつだけなり初詣

ドア開きて木枯沁みる相模線

木村歩歩

かじり合う焼き唐黍や初詣

雪降れば今来た道の白く消え

瀬祭と八海山と雪愛でん

六尺のこけし灯籠尺の雪

今泉如雲

雪の夜のキースの澄みしピアノかな

露天湯の湯気吹き飛ばし北ならい

黄昏の速足のとき杵香^{ひいらぎか}

今泉由利

帰りゆく坂道の先二日月

急坂を降りきて出逢う石路^{つわ}の花

茶の花の雄蕊数へてをりにけり

湯婆^{ゆたんぼ}の温もりといふ心ばせ

初木神社熱海さくらの一分咲き

矢崎直人

自転車を押してもらふ子鳶舞ふ

初島や富士の笠雲磯料理

かさね吟行会

「日比谷公園」 令和四年一月

濱田 紀政

待合せは生花店前春隣

さち子

生花店は日比谷花壇である。私が日比谷公園に初めて来たのはもう五十年以上も前になる。大学受験で上京した頃だった。日比谷花壇は今、頑丈なコンクリート製だがその頃は店内が見渡せるガラス張りだった。道一つ向かいの帝国ホテルもフランク・ロイド・ライト設計から一九八四年に建替えられた。日比谷公会堂は浅沼稻次郎が刺殺された事件で知られるが、現在は耐震性の問題から休館している。周二氏が公会堂を見ながら学生時代の学友の話をしてくれた。学友の父は日比谷公会堂に入居していた共同通信社の記者だった。ある日、学友は周二氏と共同通信社に来て父に小遣いを貰い、銀座で奢ってくれた。学友は十年ほど前に亡くなっている。

近くにある日比谷図書館に私は受験時代、頻繁に通っていた。食堂にいた女子大生と街頭宣伝車のメンバーが

延々と議論していた。

冬薔薇や工事現場の人の声

しのぶ

公園の周りは高層ビルが乱立している。公園内をビジュネスマンが行き来していた。

五十年も経てば建物も人も全てが変化する。

令和四年一月の吟行は十四日。少し暖かったが、風が強く、大噴水は左右に揺れ、逃げ惑うほどだった。

もののふの終焉の地や冬木立

周二

もののふ（武士）は仙台藩主伊達正宗である。江戸時代全国の諸大名は幕府から江戸城下や周辺に広大な居住地を与えられ、藩邸を設けていた。仙台藩の上屋敷は現在の日比谷公園にあった。正宗は寛永十三年、七十歳の時、上屋敷で亡くなった。明治時代になると大名屋敷は更地になり、最初は練兵場だったが後に日比谷公園になった。

日比谷公園には雲形池、心字池がある。

松本楼の裏にある雲形池はドイツの公園様式を取入

れ。池の周りは春に桜、秋は真っ赤な紅葉とビジネスマンに安らぎを与えている。

枝高く冬日に熟るる花梨の実

善恵

雲形池で有名なのが銅製の鶴像である。

銅製の鶴の姿や池氷凍る

陽子

羽根を広げた鶴は口から水を噴出している。明治三十八年東京美術学校（東京芸大）の津田信夫、岡崎雪声の作で鶴の像に氷柱が下がる光景は冬の風物詩になっている。

心字池は江戸城のお濠の一部で石垣が残っている。雪吊や可愛らしい藁で編んだ霜除が三体並んでいた。集まった人達がカメラを向けていた。

雪吊の松を被ひて池に伸び

京子

雪吊を逆さに映す心字池

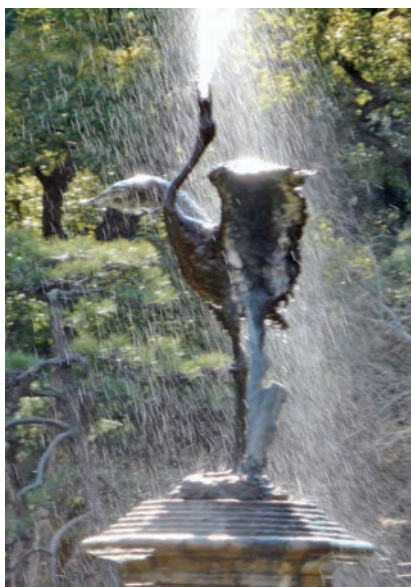
紀政

雪吊の縄の煌く日の光

正規

看板に東京に雪吊は必要ないかもしれないとあったが、冬の景色が嬉しかった。

冒頭のさち子氏の句、待合わせは生花店前春隣 立春は二月四日、もうすぐ春である。次回の吟行は二月、季語は・春を見つけられるか、楽しみである…。



『酔いの徒然』（二一九） 丸山 酔宵子

『除夜の鐘と白みそ雑煮』

今日のコロナ感染者は東京でとうとう1万人超えて、全国では8万人超えとなつてしまった。アメリカや英国などの欧米諸国と比べれば少ないとはいえ、第六波は何時まで続くのか何とも不安な毎日である。

昨年末、第五波も終息しそうな雰囲気でも新年を京都で迎えようと、29日から性懲りもなく再び京都に向かった。新年を迎える用意は万端整え、毎年俳句を入れた年賀状も早々に準備。

今年の俳句は、毎年、NHK紅白歌合戦の後に放送される「ゆく年くる年」で必ず中継される知恩院の大鐘の「除夜の鐘」を兼題としたのである。

大晦日、折角だから是非見たいと、知恩院のホームページを検索したところ、「除夜の鐘」見学者抽選とあり、即座に応募したが、コロナ禍で人数制限もあり即終了。NHKの中継を思い起こせば、七〇トンもある巨大な鐘を、親綱を持った掻き手が、「えーい、ひとーつ」と掛け声を発すると、子綱を持つ一六人の僧侶が「そーれ！」

とタイミングを合わせて撞木を大きく引き、掻き手が撞木に仰向けにぶら下がるように、体全体を使って大鐘を打ち鳴らす。

えーいひとーつ坊主鐘打つ百八つ

酔宵子

大晦日、三条のホテルで年越しそばを食べた後、防寒装備万全に、ボルサリーノを目標に被り小雪舞う四条河原町を八坂神社に向かうと「ゴウウー……ン……」知恩院の大鐘が令和四年の新年を告げる。八坂神社には屋台がびっしりと並び、晴れ着を着た老若男女で一杯である。

八坂神社にお参りした後、雪も大粒になってきた。ホテルに戻るべく河原町を歩いて木屋町に向かつて、老舗ビヤホール「ミューヘン」のある路地を入ると、まだバーや居酒屋は年越し客で賑わっている。その一角に池波正太郎や司馬遼太郎の著作によく登場している「志る幸」はある。新年のお屠蘇とお雑煮は「志る幸」と決めている、明日の為にチェックである。店は勿論閉まっているが、中は煌煌と電気がついていて、明日の雑煮の仕込みであろう、忙しく動いている様子がかがえる。

予約は一切受けず、入り口には張り紙があり、『あけましておめでとうございます。午前11時より開店します。一列に並んでお待ちください。』

加茂川の西 河原町の東

幕末の志士たちが歩いた小路に、
和の香ただよう汁の店。

平安時代、飯は客が各自持ち寄り、亭主は汁だけを調べてもてなすという風習「汁講」があり、ただ一杯の汁に込めた心、それが「志る幸」のいわれとのことである。元旦の朝は快晴。午前10時ホテルを出て、うつすらと昨日の雪が残った木屋町を高瀬川に沿って上って、一路「志る幸」に。

「ギョ、ギョー！」新年早々、河原町に通ずる「志る幸」のある路地には、既に20人以上の列ができています。昨夜は気が付かなかったが「志る幸」の裏口には古ぼけた石碑が立っていて、「勤王の志士 古高俊太郎邸跡」に建っている。

列の最後尾に着くと、糊のきいた白衣をびっしッと着て、下駄の音も軽やかに若い板前が暖簾をくぐって整理券を配り始める「お二人ですか・・・」と25番の札を

手渡された。11時いよいよ開店である。

大きな暖簾をくぐると、目の前に能舞台を模したカウンター、三条、五条の欄干に見立てた席が設えてある。能舞台の将に棧敷に座り、周りのお客の様子を見ながら恐る恐る注文する。「利休弁当」に「白みそ雑煮」そして白鶴熱燗で2本ください・・・」

能舞台を白足袋で床を摺る音とともにさつと、京のおばんざいの「利休弁当」と熱燗が手前に設えた朱塗りのお膳に運ばれてくる。

「あけましておめでとうございます」と取り敢えずの新年乾杯をしていると、早速白みそ仕立てのお目当ての雑炊である。「アーツツ、これが、平安から勤王の志士も楽しんだ白みそ雑煮か・・・」

厳しいコロナ禍が続きますが、皆々様にとって、今年もよい年でありますように。

木屋町やボルサリーノに小雪舞ふ
初雑煮床摺る音や太郎冠者

酔宵子

楽しい時間 112

山本紀久雄

2022年1月31日

九代目市川團十郎・・・其の十八

九代目は、見物客に支持されない現状を前に、「もう新作はだめだ」と失意に満ちた「太息」をついていたタイミングに登場したのが、今までとは異なる壮士芝居であった。

東京における壮士芝居は、川上音二郎が明治24年（1891）6月に東上し、中村座において明治15年（1882）に起きた岐阜事件を扱った『板垣君遭難実記』などが舞台にかけられたことを嚆矢としている。

当初、壮士芝居は、見物客に「演劇としては見るに堪えるもの」と受けとめられていたにすぎなかった。

しかし、日清戦争が明治27年（1894）8月1日（正式に宣戦布告されに日）勃発。川上音二郎率いる壮士芝居は、宣戦布告からひと月と経たない同月31日、浅草座で『壮絶快絶日清戦争』と題打って幕を開けたのである。この興行は、開戦間もなき時期であったことが功を奏し、「近來歌舞伎にても其例無き数十日間大入り」となり、壮士芝居が認知されていくことになった。

川上音二郎（文久4年1864～明治44年1911）は、福岡生まれ。14歳で上京、放浪生活の末、自由党壮士となり自由童子を名のる。自由民権運動に対する取締りが厳しくなると大阪で落語家桂文之助に入門し、時事を風刺したオツペケ節で人気を得る。明治24年（1891）川上書生芝居を旗揚げし、明治26年（1893）渡仏。帰国後日清戦争劇で大成をおさめ、明治29年（1896）神田に川上座を開場、明治32年（1899）女優で妻の貞奴とともに二座を

組織して欧米を巡業。明治36年（1903）正劇と称して『オセロ』などの翻訳劇を上演、明治41年（1908）帝国女優養成所開設、明治43年（1910）大阪に純洋風劇場帝國座を建てるなど、わが国近代演劇の発展に貢献した人物である。

一方、歌舞伎芝居の日清戦争劇は、壮士芝居に遅れること半月あまり、春木座で『日本大勝利』を9月1日に興行した。九代目も日清戦争劇に出動を余儀なくされて、同年11月の歌舞伎座興行『海陸連勝日章旗』に菊五郎とともに舞台に立った。

しかし、これは予定していた25日間の興行をやと打ち切ったほどの大不評に終わってしまう。『郵便報知新聞』（明治27年11月8日）は次のように述べる。

『先づ歌舞伎座から意見を述べますが全体團菊の顔をそろえて日清戦争とは驚き入るではないかヤレ成歓だの玄部門だのと附景気を張たところでゴナ狂言に團十郎も菊五郎も入ったものか役者も役者、作者も作者、実に呆れて物が言えないね・・・ゴナ狂言は総て士官は士官らしく兵士は兵士らしく専ら実地を穿つのが目的であろう、それに陸軍士官が自ら「某」といひ師団長が兵士を励まして「出来す、出来す」と褒めるかと思へば大佐中佐と肩書付けた士官が「イヤ左様で御座る」などと挨拶する・・・僕は余り可笑しいので臍の皮がよれた・・・』

歌舞伎役者による「士官」の士官とは思われない台詞回しに、思わず「臍の皮がよれ」るほど失笑してしまったのである。九代目は水夫舵藏に扮したのだが、時代言葉を使い「台詞が水夫になつていない」と指摘され、「親玉近來の大失敗」と酷評されている。

いわば時代言葉を用いる歌舞伎芝居の世界では、日清戦争という口語体が交わされる同時代の見物客が共感し、追体験できる舞台を繰り広げていくことが困難になっていた。

九代目も『海陸連勝日章旗』への出勤について、当然であるが難色

を示していた。

一方、見物客も、歌舞伎役者に対し、時の戦争という「趣もなく技も要せぬ」奇をてらう舞台は求めていなく、九代目、菊五郎の日清戦争劇に出動するのを気の毒がついてた。

それよりも『海陸連勝日章旗』含む歌舞伎座の、團菊の顔合わせによる中幕の『傾城反魂香』演劇に向けられた。元は近松門左衛門作の人形浄瑠璃で、三段構成のうち、上の段の「土佐将監閑居の場」、通称「吃又」がよく上演される。

九代目の又平、菊五郎の女房おとくとくという顔合わせだっただけに「是を見ざる者は馬鹿と云ふを憚らず」というほどの舞台として、見物客に大絶賛されたのである。

「絵師土佐光信の弟子又平は、吃音の上に田舎者であり、女房おとくとくともに細々と暮らしている。又平の弟弟子修理之介が、襖から抜けだした虎を筆力で消した栄誉により、土佐の苗字を許されたことを聞き、自らにも土佐の苗字を賜るべく光信に嘆願するが許されない。又平は、自らの境遇に絶望し、女房おとくとくともに死を決する。その最期にと手水鉢に自画像を描くが、一心を込めて描いたその絵は、手水鉢の裏まで通り、その技量が認められて土佐の苗字を授かったものである」

九代目は、又平の「画にのみ精神を傾け尽せる」一途な思いが奇跡を生み、土佐の苗字を授かるという念願を叶えるに至った点に着目し、「吃音といふ芝居は宛熊に西洋の立志篇なり」と語っている。（写真は



六代目尾上菊五郎の又平と三代目中村梅玉のお徳、昭和14年5月歌舞伎座）

九代目は、近松の作である『吃又』を『西国立志篇』の底流に存する精神と照応させることで、同時代的視座のもとに読み替えていたものと指摘できる。

ということは、九代目と同じ時代を生きた客の中にも、『吃又』を同様の視座から読み替えていた者がいた可能性が高いのである。

つまり、『吃又』が客から絶賛された所以は、團菊が同時代的情況にも通底する芝居をその至芸によつて具現化したことによるものと考えられる。（『明治歌舞伎の成立と展開』）

この主張は重要である。そもそも、壮士芝居の日清戦争劇は、「我國民の士氣を鼓舞せん為めの趣意に出でたるもの」（都新聞第2900号明治27年9月18日）であった。それだけに見物客は、戦争の模様を「新聞」のように実況する壮士芝居を通して、現実の日清戦争を追体験し、それを「事実」として受けとめることになる。

しかしながら、いくら日清戦争という同時代の状況を追体験することができても、劇場で『吃又』に「酔えるが如き」印象を覚えたときのように、見物客の心境が戦争一色に塗り込められた社会の喧騒から解き放たれることはない。つまり、壮士芝居による日清戦争劇は、歌舞伎が織りなす世界のように、心的な社会的離脱を促すものではなかった。そのため壮士芝居の日清戦争劇は、あくまでも実況する「二種の新新聞絵説」にすぎず、國民の士氣を鼓舞するものであった。

明治歌舞伎が譲り渡したものは、こうした「二種の新新聞絵説」としての側面、すなわち同時代の状況をそのままに映し出すという「役割」に他ならない。結果として歌舞伎は壮士芝居という相手を得て、ここから本来の役者の芸をはじめとする様式性を守り通す道を選択するに至ったのである。その際、九代目は何を心中に基準としたのか。次号続く。

絹の話 (136)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

家蚕の進化を見て人類の未来を予測

家蚕の発生と進化

ウイルスは30億年前から活動していると言われていきます。昆虫は4億8千万年前、哺乳類は2億年前から進化した、そのうち人類は400万年前からの新参者です。

無脊椎動物の昆虫は当初70cmにもなるトンボなどが繁栄していましたが、体を小さくし、命のサイクルを短くしていち早く環境に合わせて自体を変化させて繁栄する道を選びました。現在の地球上の生物の75%以上が昆虫で、地球はまさに昆虫の星です。

新石器時代の1万年前、人々は犬とは一緒に暮らしていましたが、牛、羊などは家畜化され始めていたと思われますが、狩猟による生活に依存していました。

その中でも昆虫は女子供にも簡単に捕獲しやすい大切な栄養源でした。

しかしどんな虫を食べてよいか、犠牲を伴う長い経験の積み重ねであった様です。毒を持つもの、ビタミンA等を破壊する酵素を持つもの、有害なウイルスを宿主さ

せているもの等々危険と隣り合わせでした。

まず、食べて害がなくてうまいものが優先されます。生食でもよい物、焼けば安全な物、発酵させればよい物等。現在の東南アジア山岳地帯の人達が一番うまいのはトランチュラのような大きな蜘蛛、二番目は蟬、三番目が繭の蛹と言います。

美味しいと言っても蜘蛛はそれぞれが広い縄張りが必要とし、蟬は長い年月地中で過さなければならぬので家畜化は難しいのですが、蚕は桑の葉に付き1ヶ月弱で繭を作り、管理し易い事がわかり、家畜化が進み本来は桑の葉のカルチノイドを摂取して黄色系の繭でしたが突然変異の白い繭を手に入れました。現在世界中で養蚕されている蚕は昆虫食の盛んな1万年前、中国の揚子江河口周辺で食べたクワコから糸が採られ、6000年前の中国黄河付近で糸を採るために家畜化されて現代の様な繭を作る蚕になりました。

家畜化された蚕

家畜化された蚕は自ら餌を探す事はしません。目の前に与えられた餌を食べます。羽があっても体が大きくなりすぎて飛べなくなり交尾出来ません。人が補助しなければ子孫は残せなくなりました。人間の助けがなければたちまち絶滅してしまいます。

この様に完全家畜化された蚕は最近遺伝子組み替えなどもされ、桑の葉ではなく人工飼料で無菌室の養蚕工場で年中休みなく生産されるようになりました。温度や幼虫の休眠ホルモン、幼若ホルモンの調整で自由な大きさの幼虫や繭が作られ、繊維利用ばかりでなく、医薬実験やインターフェロン等の生産動物として幅広く利用される様になってきました。

これは水耕栽培の野菜や海の魚介類に野菜屑などを与えて育てる陸上養魚にも似ています。

人間の生活の変遷

人々は住む地域によって衣食住が工夫され、地域の自然と共生してきました。そこに生きるためにその地域の人のDNAに地域独特のシステムが組み込まれて、その地域なりの健康が保たれて来ました。

古老の言い伝えによれば健康に過ごすには「その地域の4里四方の物を食べるのがよい。よそに行ったら水に氣を付けなさい」と言っていました。糞尿を含めた堆肥などはその地域の人や植物の多くの雑多な細菌が食物を通して体内に入り、地域特有の腸内細菌を増やし健康維持に役立って来たと考えられます。

また路地の野菜の苦味や天日干しの食品の旨味などは健康維持に一役買っていると思われれます。

ところが昨今のグローバル化の波は世界中から食材を集め、工場生産された画一な物をスーパーなどで販売し、みな一律の物を食べる様になった結果、人々の腸の腸内細菌も地方性が薄れて、何処も一斉に同じ病気にかかり易くなりました。まさに人も蚕と同じ様に家畜化されてしまっています。

人間はどこまで生き延びられるか

地球上の生物は大型化したものの、長命になったもの、集団を作らないものの多くは絶滅しています。

人間は地域環境によって体型体色を変え、目鼻の凹凸を変化させ、体毛を減らし皮膚での体温調節を取得するなど、涙ぐましい努力をして来ました。さらに人間と他の生物との大きな違いは殆どの生物が「着の身着のままその日暮らし」であるのに対して保存、移動、加工等の能力を取得した事です。結果、長命になり「未来」という時空を得ました。ところが環境破壊を伴う管理社会の進行は人類の生物由来の対応能力をはるかに超えてしまいました。環境の変化は今後の現生物の生存をどの様に変えて行くのでしょうか。人間には蚕のような助っ人はいません。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年2月2日

腸内環境を整える

花粉もまだ少ないですが

身体が反応する様になってきましたね

アレルギーの施術は1年を通して入れているので

花粉症がある患者さんでも

まだ感じていない方がいるのを見るとホッとします

この時期 手洗いはもちろん

うがい と 免疫力が大切です

そこで

免疫力といえば小腸です

以前 本田のひとり言 で個人個人の身体にあう

ヨーグルトの選び方を書かせてもらいました

今回は

1日2回 朝晩の食後に摂取する晩の方を

普段の株から少し変えてみるというのをお勧めします

腸内環境を少し変えてみるのも

免疫力向上 アレルギー抑制につながります

色々な角度で身体を守っていきましょう

の月の御予約開始しました

今日も笑いながら行きますよっ

2022年2月4日

冬から春へ 身体の切り替え時

前回の 本田のひとり言 で

なぜ腸内環境の事を書いたのかといいますが
個人差がありますが

1月下旬から2月上旬に身体が

冬使用から春使用にゆつくりと変わります
ということとは

腸や内臓の環境や動きも変わってくるので
身体への負担が大きくなります

例えば

首 肩 腰のギックリ系

逆流性の様な症状や痛みなど胃腸の不調

便秘や下痢

などです

ですので

切り替わる時の準備が必要となります

3S+ゆたぽん

腸の株の変更

マヌカハニー

座りっぱなしにならない

うがい手洗い

などなど

普段から書いていますが

もう一度見直してみてください

今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」 51 江上浩二

今や4次元宇宙シアターが自宅のパソコンで

もう10年以上も経ってしまったが、平成二十三年五月二十八日、三鷹の国立天文台を見学する機会に恵まれた。午後雨降りの中、緑が映えた東京にも、このような森、木立があったのかと驚嘆の中、ある目的の為に訪れた。総勢6名プラス、天文台所轄の大学の先生との軍団となった。ある目的とは、ハワイ島のすばる天文台を始め大型望遠鏡が建設され、宇宙の果ては130数億光年先だが、宇宙の膨張速度係数はこれまでより大きいとか、わくわくさせる発見が続き、これまで観測された銀河系を全宇宙空間にマッピングして、我々を小さな宇宙船に乗せて仮想的に旅してくれるシアター体験である。

さて、初めに訪れたのは口径20cmの太陽観測用の屈折式望遠鏡小屋。正確な建設は1921年、大正8年のことだそう。望遠鏡、ドームの回転など全てが手動操作で行うものだそう。ちょっと見過ごしてしまいそうだが、隣に小さな土盛りがあり、それは7世紀ごろの方円墳（古墳）だそう。その時代から武蔵野の丘に人は居っていて、天文台の高台の下には多摩川へ流れ注ぐ野川があり、綺麗な水も得ていたのだろう。古墳の周りを掘り返せば、当時の遺蹟がザクザクと

出てくるかもしれない変な想像をしてしまった。

さらに足を進めると、次の65cm望遠鏡ドーム（1926年建設、大正14年）へつらなる直線の道脇に、太陽系の模型が正確な距離間隔とそれぞれの惑星の大きさを縮尺して作られている。太陽と土星の間隔が長さ80mくらいになっているのだが、太陽が大人の肩幅程度の円盤で、地球などは小指先の小さな正露丸の玉にもならないくらい小さい。この大きな太陽系模型の先の65cm望遠鏡ドーム搭の手前に、今日お邪魔する目的の処がある。この口径65cm屈折式望遠鏡はドイツ製で光学系などカールツサイスの素晴らしいものを使っている。今回見学の機会を提供して頂いた先生の話で、一つこんな「取引」も当時あったのかと吃驚してしまった。この望遠鏡は何と世界第一次大戦の戦後賠償として、日本がドイツから受け取ったというのだ。彼の地からここ三鷹までは運んで、部品など全て校正し、観測に使えるまで再生したようだ。当時の戦争賠償ではこんな物々交換までしたのかと、自分の無知をさらけ出してしまった。今で言うところ、戦争で破壊せずに先端製品・システムを戦利品として得るスタイルだ。

この歴史館の見学が終わって、今日のわくわくは4次元宇宙シアター体験（4D2UDームシアター）がメインディッシュで、簡単に言うとこれまでの宇宙天体観測で人類が知り得た全ての星、銀河の空間情報をコンピュータに取り込み、

地球から飛び立った宇宙船に乗った様子が3Dシアターで楽しめる仕掛けである。まず、太陽系から脱出、途中には小惑星帯、冥王星より外のオルト帯も離れ、われらの天の川銀河系（我々の太陽系は比較的外側の腕の所に位置している）から脱出、宇宙誕生から130億年の全容が見られる遠方まで宇宙船が進む。途中では銀河系が様に分散分布しておらず、局部的に存在しそれが網目状になっている様子も分る。我々人類にとつて調べることが出来ない宇宙領域もある。それは我々の銀河、天の川があまりにも明るく、天の川銀河の断面方向から見ると先の宇宙が途中に存在するガスの吸収などで見えないことである。

これまでの、光の点を星として映し出すプラネタリウムと異なり、惑星、恒星、銀河などが画像合成されたされたものが3D映像投射されているので、立体感は素晴らしく、時には見ている人が宇宙酔いになるそうで、その時は3D眼鏡を少しはずしてお休み下さいという注意もあるくらいだ。私は宇宙酔いもなく、固定した座席に座りながら、宇宙船がいかに空間を、自由に方向を変えながら凄いスピードで飛び回る疑似体験が出来た。

見学後の天文台の先生との質疑では、先生は一般の恒星や銀河系の研究ではなく、我々に一番身近な「我々の太陽」が研究のテーマだそうだ。それで、地球の衛星軌道を回るX線観測衛星^{スピア}なので^{スピア}を設計し打ち上げ、太陽の画像を観察し

研究しているという。宇宙は誕生後約130億年が経過している。我々の太陽は誕生後約50億年で残りの水素量などから推定してもう50億年くらい寿命があるそうだ。地球は誕生後46億年くらい。ここで簡単な計算で分るが我々の太陽は宇宙が出来て80億年くらいして誕生したことになる。

そうすると、その元は何だったのか？答えは既に存在していた恒星の寿命が尽き超新星爆発して飛び散った水素やそれまでの恒星内部で核融合反応が進み、合成された少し重たい元素が元だそうだ。したがって、我々の太陽は宇宙の屑から出来ており、本当に真新しい水素だけで出来ている恒星と違って、我々の太陽には実は鉄のような重たい原子が含まれているのだ。地球上の生命体も同じく太陽系が出来るから前に存在した原子元素から構成されている事も分る。非常に長い長い旅をしてきたことが解る。

以上が10年以上も前のオンサイト体験型の体験記だが、このような仮想体験がクラウドで自宅のパソコンで可能であることを最近（一月二十一日）知ったのである。天体の観測データの蓄積とIT関連の技術革新；ネットワークの速度、デバイス、ハードウェア、ソフトウェア等々が僅か十余年で進み、YouTubeや The eBOSS 3D map of the Universe をキーワード検索して頂ければ視聴できます。

初狩便り
(4)



花
野
み
ぷ
り





ぼかし肥料

三月の声を聞くと、初狩の田からも畑からも、草の芽がぼつぼつと萌えだす。カラカラだった空気が少し湿気をおびてきて、遠くの間々もやさしげに見える。

いよいよ今年も環境保全型農業(有機的農業)をスタートさせる。

有機的農業の要は土づくりにあり、私たちは有機肥料としてぼかし肥料を作り、使用している。米ぬか、菜種粕、魚粉、糖蜜、EM菌と穀殻を混合し、大きな樽で一年間発酵させる。時間をかけて発酵させたぼかし肥料は馥郁としたとても良い香りがする。

三月、これを田に撒き、トラクターで土とまぜ、土の中の微生物を増殖させる。微生物が増え、イトミミズが増え、小さな虫が生まれる。これらを餌にするツバメや野鳥が飛来し、トンボやカマキリをはじめ、多種類の昆虫がやってくる。こうして豊かな生態系が私たちの田んぼに繰り広げられる。三月中旬になれば、畦には、オオイヌノフグリ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウなど可愛い花が咲き出し、ツクシも芽を出し、わくわくする季節の到来となる。

『千曲川旅情の歌』に想いを馳せて』

中 屋 保 之

趣味で詩吟を習っている。李白だの杜甫だのという中国は唐の時代の詩が中心であるが、時折、日本独特の短歌や俳句も吟ずることがある。少し前、我が会の宗家はお孫さんと同行した先で聞いた讃美歌に譜をつけて吟じられたと伺った。中に、「新体詩」と云われる分野があり、先だつては、宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」を習った。今、島崎藤村の「千曲川旅情の歌」を習得中である。

一九四七（昭和四十五）年、私は青雲の志（?!）を持って社会に飛び込んだ。一月半ほどの本社での研修を終え、百人の新人たちは幾人かの先輩社員に見送られ、ある者は羽田から飛行機で、ある者は東京駅から東海道新幹線でそれぞれ赴任地へと向かつていった。そんな中、たった二人だけは上野駅からの出発であった。行く先は福井と長野。当時の上野駅と東京駅とはグレードに大きな差があった。のちに、福井支店へ赴任した同期は「なんで、オレが北陸の福井なんだ！」と、些か見当違いのジェラシーを吐露したものである。『上野駅』の名誉のために断っておくが、今ではライバル駅に伍して遜色のない素敵なステーションに変容している。

新人社員の赴任が数年ぶりという長野支店の先輩社員が、支店からそう遠くない駅まで支店長専用車で出迎えてくれたのには面食らった。その後、専用車の運転手の松坂さんには、よく川遊び等々に連れて行ってもらった。千曲川もその一つである。

当時の証券会社の主な収益源は、株式の売買と投資信託や公社債の募集手数料であった。中でも、株式を扱う「営業課」は花形であった。世間知らずの私は、公社債の募集などを主な業務とする「得意先課」に配属されたことが不本意であった。しかし、このことが私を「千曲川旅情の歌」に巡り会わせてくれるのである。

私は、長野県民なら誰でもが知っている「信濃の国」の歌詞にある「松本・伊那・佐久・善光寺 四つの平は肥沃たいらの地」

の佐久平と呼ばれる小諸、軽井沢から八ヶ岳の麓あたりまでを担当地域としていた。中でも、小諸にあった中部電力のベテラン社員と一緒に中部電力社債を募集して回る仕事を楽しかった。証券会社の、しかも青二才が訪問しても中々気を許してはもらえない。ところが、地元電力会社のベテラン職員が「戦争で日本が負けても中部電力はなくなるなかつたでしょ!!」という大抵は家に招き入れてくれる。そして、商品の説明を何から何までしてくれるのである。私は、最後に購入代金を数えて、証書をお渡しするだけで済む、という実にありがたい営業活動をしていた。

一日の訪問外交を終えると、彼は必ず千曲川を眼下に見下ろす場所にある歌碑の前に私を伴ってゆき、朗々と「小諸なる古城のほとり雲白く・・・」を朗詠、そして深々と叩頭するのを常としていた。若気の至りで、私は、その詩の意味も知ろうとはせず、感傷に浸ることもなかった。

あれから五十数年、詩吟を通じてこの詩と再会できるとは思ひもよらなかった。不思議な縁^{えん}という他あるまい。この詩が心に沁みるようになるには、相応の年月と人生経験が必要ということであろうか。

昨日またかくてありけり 今日もまたかくてありなん この命^{いのち}なにを醒^めぬ 明日をのみ思ひわづらふ
信州の四季は、美しい。

千枝女將の別宴に寄す

桜台楼主人

酒客は君に因つて寵児と成り

憂いを払い興に乗じて醉歌弥し

杯を挙げて空しく想う昔遊の事

正に是れ人生別離足る

寄千枝女將別宴

酒客因君成寵児
拂憂乘興醉歌彌
舉杯空想昔遊事
正是人生足別離

（語釈）○寵児…かわいがられ、ちやはやされる人。○人生離足る…晩唐の詩人、于武陵の詩「酒を勧む」の結句。（人生には常に別れがつきものだ）の意。

※今日でお別れね、もう、あえない。涙を見せずに、いたいけれど……。

千枝さん、いよいよお店を閉じられますか。鹿児島は指宿でご主人とゆつくり過ごされますか。いいですね。それは大いに良いんじゃないでしょうか。向こうは暖かくて海が綺麗ですね。どうぞ、平安にお元氣にお過ごし下さい。又お会いしましょうね。

しかし、残念ですね。良い店でしたね。何しろトータルで、ママさんのセンスは抜群だよ。お客さんはみんな、ママに甘えて安心して飲んだね。みんな、よく酔って、よく歌ったね。皆さん又、歌がうまかったよね。それはママが上手にさせたんだと思うよ。私もその一人だ。ママの前では「紳士たれ」と思ったけど、ついつい自分も乱れる時がありました。許して下さいね。でも、楽しむと同時に、やはり心の憂さを晴らしてんだよね。皆さんも同じと思うけど……。

でも、ママのおかげで本当に良い酒が飲みましたよ。人生の「生き、死に」「別れ」は、これ仕方ないね。「千枝」がないと思うと本当に淋しいけど、ここは一つ虚勢を張って乾杯といきましょう。「よき人生に乾杯！」以上、平成十七年五月八日の原文そのままですが、三年目になるコロナ禍下、特に氣に入ったクラブや飲み屋さんが或いは店を閉じ、難儀している今日、吾が家内も氣に入っていたこのスナックバーを想い出し寄稿します。

奄美泥染

今泉由利

飛行一路 夢は 神と交はる
ひこういちろ ゆめ かみ まじ

車輪梅の単寧に染め出す
しゃりんばい たんにん そ いだ

泥田の鉄分に深く浅く
どろた てつぶん ふか あさ

光沢の凝し黒色大島紬
こうたく こら こくしよく おおしま つむぎ

飛行一路夢神交

染出単寧車輪梅

泥田鉄分深淺色

光沢凝黒大島紬

語釈

単寧^{たんねい} 〓 タンニン 車輪梅 〓 樹木名

泥田の鉄分 〓 泥にふくまれる鉄分

凝黒^{こらくろ} 〓 しつかりとした黒

大島紬 〓 奄美大島特産 まゆを紡いで糸にし織る

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

動くとき寝る

動くとき寝るは陰陽なり
陰は寝る事休むこと、陽は動いて温まる
陰極まりて陽動き、陽極まりて陰静まる
しっかりと寝れば朝目覚め
しっかりと動けば夜寝れる

陰と陽は繰り返し、流れの中で安定す
陽は運動、活動ぞ
動く基本は歩くこと
歩いて筋を動かせよ
筋が動けば血動く
血が動けば温まり、
汗をかければ発散じゃ
この汗陽の極まりなり
発散すれば夜寝れる
動くが寝るの前提じゃ
足腰丈夫が長生き元氣
立ったりしゃがむも大事だぞ

陰と陽は繰り返す、流れの中で安定す
陰は休息、睡眠ぞ
寝るから陰氣が充実す
寝る子は育つ、大人も育つ
陰の充実元氣のもと
寝るは養生の基本なり

夜は心を落ち着かせ、
目を使わずにまったりと
ロウソク灯してみるが良い
目が落ち着けば寝入りすぐ
深い眠りの世界へと
落ちれば陰の充実じゃ
夜の明かるさ目の毒ぞ、
寝れぬは病氣の始まりじゃ
陰と陽は繰り返す、流れの
中で安定す
まずは朝日を浴びること
朝の散歩をはじめましょ



春と肝の気

春は木の^き気、動きの気

春は陽氣が動き出す

あらゆる生命動き出す

草木も虫も、動物も、人間だって同じこと

人体内部が動き出す、頭も身体も動き出す

春の陽氣に煽られて、肝の臟氣が動き出す

肝氣は「動き」を^{かきど}主り、

筋を動かし、血を動かす

筋を動かしや、血も動く

肝氣が動けば^木氣が燃える

春は陽氣が動き出す

冬の寒さのかたまりを、動いて徐々にほぐすべし

内から徐々にほぐすべし

いきなり動けば筋痛め、

足が攣つたり良いことなし

動くは歩くが基本なり

徐々に動くが肝要じゃ

慣れたら動きを増やせば良い

体力つければ、元氣がつく

元氣があればなんでもできる

動くが春の養生なり

春は陽氣が動き出す

春に肝氣を動かせば、夏の暑さもなんのその

木が燃えれば、火がつくぞ

火に慣れれば、暑くない

木が燃えなきや、冷えたまま

冷えたままでは火は熱い

動くは内の燃焼ぞ

内の火燃えれば元氣得る

燃やせる力が体力・元氣

元氣がなければ夏バテじゃ

春は元氣を育てる時

立春すぎたら動くがよろし



「氷魚」のことから(254) 岡本八千代

今日、家のベツトにあつた小机の用紙をみたら、書けるかしら?と書いてあつた。さっそく書いてみた。何とか書けるかも知れない。このまま鉛筆を握つて今の思いを書いてみる。

ベツトから見える電信棒、隣りの家の屋根。そのまた北の方の家の屋根、今となつてはみな懐かしい光景だ。うれしい筈なのにそんなに嬉しくない。むしろ寂びしい?。

人間の感情のその時、その時のわがま・さかとも思う。

病院にいた時のあの緊張感に比べれば、何と自分に返つた自由さであるうか。やつぱり自分の家はいい。自分が自分でゐることができる。しみじみと嬉しさに変わつてくる。

苦しいけれど幾日までに原稿を書かねばならないという苦しみがある。もう何もかも止めようと思つていた筈の私。人間は、幾日までにかかねばならないというものがあるということは、いいことかもしれない?とまた思い返した。

「人間とは何ぞや?」考える人なのか。じきに怒れる人なのか?またわけもなく笑う人なのか?哀しむ人なのか?自分では自分で楽しむ人なのか?わからない。それこそそのわからなさ、その人、その人、にあつてこそ楽しい?ものなのか。

わからないままではないか。書いているうちにだいたい理屈っぽくなつてきた。

京都の或染色家が言つていたことを思いだす。「完璧家」がいいのではない。ここをこうしたかつたがーというミスがあつた方が、より完璧なんだよ」と……。人間、一つのものを仕上げるのに、ミスがあつた方がより良いものだ」など。私は、それを読んで知つた時、非常に心を救われた。「そうか、そういう見方、考え方もあるものか?」と。

完璧の中にある染め方の像、なるほどなあと思うようになった一つのこと。うれしい。うれしい。

完璧であることは、確かにいいと誰しも思うことだが、「完璧でない方がいい」という考え方、ものの見方が人の心をより救う力があるように思う今夜の私にうれしい救われることばだと思ふ。

今夜は私にとつて救われる言葉だ。しかし救われても救われなくても人間には不思議なことが多い。私はその何者かをせんさくする必要はない。――。なにもかも自然に任せよう。それしかない。

それがその人にとつてどうすることもできないのではないか。そういうことがその人にとつて一つの運命ではないか?。

書いているうちに、運命ということばが浮んできた。その人その人にとつて、また、私は私の「運命」を持つているから、どうすることも出来ない。

それが「自然法爾」ということばか?私、今夜はこのことばに眠る。

編集室だより 二〇二二年一月

今泉 由利

○農林水産省の「食から日本を考える」という名目の栽培キットをいただいた。さっそく用意されているポットを組んで、水を注いで、サラダホウレンソウの種まきをした。二日目くらいで芽がでた。一ヶ月程で収穫出来ると書いてある。育てている同じテーブルでサラダといただく日ももうすぐ。

○死なないつもりでいるけれど、私が死んでしまう時には、三河アラragiを託したいと思つてた。夏目勝弘氏と連絡が取れなくなり、焦る。そして、コロナ疾患で、亡くなつてしまわれたことを知る。三河アラragi関係全員の信頼の的でした。頑丈で穏やか、物知り、とても頼もしかったお人。今までを、ありがとうございます。これから、ずっとずっと頼りにし続けます。

○テレビ番組「李白長江をゆく」を見ていた。玄宗皇帝おかけえ詩人「李白」。罪人として、長江二〇〇km、流刑の旅。その道中の李白の心の漢詩を、長江の流れに沿う風景、風物と共に。

「汪倫に贈る」

李白

李白乗舟将欲行
桃花潭水深千尺
不及汪倫送我情

「峨眉山的歌」

李白

峨眉山路半輪秋
影入平羌江水流
夜發清溪向三峽
思君不見下渝州

「山中問答」 李白

問余何意棲碧山 笑而不答心自閑
桃花流水杳然去 別有天地非人間

「春夜洛城に笛を聞く」 李白

誰家玉笛暗飛聲 散入春風滿洛城
此夜曲中聞折柳 何人不起故園情

「早に白帝城を發す」

朝辭白帝彩雲間 千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不住 輕舟已過萬重山

「天門山を望む」

天門中斷楚江開 碧水東流至北廬
兩岸青山相對出 孤帆一片日邊來

「廬山の瀑布を望む」

日照香爐生紫烟 遙看瀑布掛長川
飛流直下三千尺 疑是銀河落九天

漢詩とは、何が何だかわからない。止めたほうが良い、と思う程、わからない。漢詩吟を聞くのは好きだが、前後左右、少しも理解出来ない。そんな時、偶然、この番組を見て、中国を流れる長江の、年月を経た風景に、李白の詩が重なった。今までの、吟じたことがあつた漢詩を吟じてみた。

古い古い中国の詩に、景色が加わった。時代背景が加わった。「このようなことだったのだよ」と李白さんが教えて下さっているような気持になった。李白さんと、晩酌をしているような気持にもなり。

コロナ禍は、私にとっても沢山のことを教えてくれました。沢山のことを失ったことも確かだけれど。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL 〇三・五九二四・二〇六五
ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、
メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ
ラギ」誕生。

◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続けてき
ました、続いてゆきます。